

はじめに

歯が安易に抜歯されている

筆者が大学を卒業した1972年当時と比較してみると、近年の歯科医学は基礎研究、材料・器材などの広い範囲でさらに大きな進歩がみられる。その成果は歯科の二大疾患であるう蝕や歯周炎の予防と治療にも反映され、国民の口腔への健康意識の高まりも相まって、“生涯、自分の歯で噛む”という社会的な運動まで提案され、その実現は決して夢ではないと思うことさえあった。

しかし現実にはこういう機運のなかで、近年、気になる現象が起き始めている。それは、歯科医学が最大の目標としてきた“天然歯の保存”というテーマが揺らいできたことである。とくに、近年のインプラントの普及に伴い、歯牙保存のための努力が以前に比べて薄れ、安易に抜歯が行われる傾向がみられる点はまことに残念である。

このことは内外の臨床誌上、書籍、講演会などで発表される、手本となるべき症例にさえ強く感じられる。加えて、日常臨床においても、努力すれば十分に保存できるケースが抜歯と診断され、インプラントもしくは他の処置をすすめられたとして、セカンドオピニオンを求める患者が急増している現実からも感じられる [CASE 1、2]。

さらには、広く行われている講習会の内容も、歯牙保存をめざす基本治療に関するものは少なく、多くが（抜歯後にはじめて登場するはずの）インプラントに関するものが非常に多い。この傾向は国際的にみるとより強い流れになっており、本来ならば歯の保存をめざして努力、啓蒙をしなければならない影響力のある学会や学術団体にもみられるようになってきている。

歯科界のこれから進むべき方向は本当にこれでよいのだろうか？

CASE 1

歯が安易に抜歯されている① 48歳・男性 深い縁下カリエスで前医で抜歯と診断されたケース



図①



図②

図①② 1996年4月： $\bar{6}$ に髄床底を穿孔するほどの深いカリエスがみられた